



人文社会科学の新しい「知の共同体」を目指して

高知大学人文社会科学部の挑戦

高知大学
人文社会科学部長 岩佐和幸

高知大学人文社会科学部は、旧人文科学部を改組してできた学部で、今年で6年目になります。

もともと高知大学の源流は、1000年前に開校した旧制高知高等学校ですが、新制高知大学誕生時(1949年)に文理学部が新設され、1977年に理学部と分離改組する形で人文科学部が形成されました。その後、1998年には「人間」「国際」「社会」をキーワードとする3学科体制へ移行し、1999年度には地域社会の要請に対応した大学院(現・総合人間自然科学研究科人文社会科学専攻)を立ち上げました。

この間、文学や哲学、心理学、歴史学、言語コミュニケーション、比較社会文化、さらには経済学や経営学、法学等多様な分野が学べる文系の総合学部として裾野を拡げ、全国各地から個性的な学生が多数集まってきました。このような歩みを経て、2016年度には新しい時代に、人文科学部から人文社会科学部へ再構築を図りました。

の暮らしは世界各地と密接に結びついています。「グローバル化の時代」と呼ばれるように、経済・社会・文化が一国の枠を越えて強く結びついているわけです。しかし、その結びつきは、必ずしもプラス効果をもたらすわけではなく、グローバルな競争が激しくなり、階層・地域間の格差・貧困や疎外感が広がるようになりました。また、社会集団同士の摩擦や、紛争に伴う難民の発生、異常気象に象徴される環境破壊、コロナ禍のような新興感染症も、ますます懸念されるようになってきました。地球の裏側の小さな出来事が私たちの暮らしに大きな影響を及ぼすことを「バタフライ効果」と呼びますが、世の中の課題がグローバルかつローカルな時代状況に対処するために、人間や社会の営みを根源的に探究する人文社会科学の個々の専門性と同時に、先人が培ってきた学際的な教養が不可欠だと考えたわけです。

そこで、人文社会科学部では、まず学科を1つにまとめることで、分野の「壁」をこえて「人文社会科学領域」の幅広い教養に触れる機会を拡充しました。また、裾野を拡げる学びと同

時に、専門的な学びも深めるため、15の「プログラム」を新設し、さらに意欲的な学生には複数のプログラムを選択できるようにしました。こうして、学生自身の「学びのコア」づくりを一方の軸にしながら、ゼミナールでのきめ細かな少人数指導をもう一つの軸に据え、卒業論文の作成を通じてオリジナルな学びを完成するシステムを導入しました。今年からは、時代に即した「多文化交流コーディネーター」養成プログラム等も始動しています。

ところで、最近「持続可能な開発目標(SDGs)」が話題になり、人類が地球全体に大きな影響を及ぼす「人新世の時代」とも呼ばれるようになりました。他方で、グローバル化の反作用として、米中対立やウクライナ危機等、国際関係をめぐる動揺も広がっています。こうした中、デジタルやAI等を用いたイノベーションが流行りですが、テクノロジーはそれを用いる人間や社会に大きく左右されます。また、エリートだけが物事を決定し、技術・市場だけで解決できるわけでもありません。従来の価値を問い直す人文社会科学の力が、一層求められています。ただ、こうした力は、既成の知

を消費するだけでなく、課題発見と分析・総合に基づく知の生産活動によってはじめて培うことができます。こうした知の生産者を育てる役割こそが、「知の共同体」としての大学の使命といえます。

転換期を迎える現在、高知大学人文社会科学部は、中央から離れた周辺部で、自由な風土を育んできた南国・高知をベースに新たな「知の共同体」づくりを目指しています。高知大学人文社会科学部の展開に、ぜひご注目ください。



Iwasa Kazuyuki Profile

1968年神戸市生まれ。京都大学経済学部・同大学院経済学研究科博士課程を経て、1999年4月より高知大学人文科学部へ。2008年4月より同学部教授、今年4月より人文社会科学部長。専門はアジア経済論、農業・食料経済論、地域経済論。主著に「マレーシアにおける農業開発とアグリビジネス」(法律文化社、2005年)、「アグリビジネスと現代社会」(共編、筑波書房、2021年)等がある。